

私は今年、何度も葬式をして説教しましたが、3年前、鹿児島で葬式があり、お通夜の礼拝に出席しました。その時の説教の中でこんな話が出ました。「私たちが死んだら、みんな神様から問われる質問がある。あなたは、私が与えた賜物を十分に発揮しましたか？」という問いでした。

私達にはそれぞれ、違った賜物を神様から与えられているのですが、その賜物を生かして互いに仕え合いなさい（Iペトロ4：10）。という教えと、マタイによる福音書25章の、世の終わりに羊と山羊を分ける時の、隣人への愛のわざをおこなったどうか、ということの問いを合わせたお話です。その時の、「賜物」という言葉ですが、ギリシャ語では「カリスマ」という単語が使われています。日本語の辞書では『（神の賜物の意）超人的・非日常的な資質、英雄・預言者などに見られる。』と書かれていて、神様から選ばれた特別な人にだけ与えられているような才能と思ってしまうのですが、私達にはそれぞれ異なった賜物が与えられている、とパウロはローマやコリントの信徒たちに手紙で語っています。

ところが、今日の福音書に出てくる「タラントン」のたとえは、どう考えるのか。パソコンで調べると、元は古代ギリシャ語の「τ α λ α ν τ ο ν」で、重量および貨幣の単位である。ラテン語では「talentum」、その複数形は「talenta」で、古英語に入って同様に単位を意味する「talente」や「talentan」となった。「重さ」の意味が転じて、中世英語で意向・傾向・性向などの語義が生じ、19世紀にはすでに「才能・技量」の語義が確立している。さらに、「才能」の語義が転じて、何らかの技能に長けた「人材」を意味する用法が生じた。また20世紀になると、通俗表現として、人目を引く（しばしば性的な）魅力をもった人を指して用いられることもある。

日本語の「タレント」には、以下の用法がある。1. 古代ギリシアおよびヘブライでの量衡（重さ）の単位、および貨幣の単位。2. 才能や技量。3. （「才能がある人」という意味が転じて）テレビやラジオなどに職業的に出演している人。「芸能人」。

このうち現在もっとも一般的なのは第三の「芸能人」を指す用法である。これは英語の「才能ある人物」という用法が芸能関係者によって日本に移入された結果と考えられる。原語とは若干乖離した用法であり、通常の英英辞典ではこれに対応する用法は載せていない。日本語の「タレント」に相当するより正式な英語表現は「テレビ・パーソナリティー」「ラジオ・パーソナリティー」などを意味する語である。

それで、というわけではありませんが、今日の福音書。「タラントン」のたとえですが、これもあまりに有名なので、勝手に先入観を持ってしまって、この箇所に出会うたびに、同じようなメッセージを語ってしまいやすいのです。「あなたの『才能』を生かしなさい」「才能を土の中に埋もれさせてはいませんか？」という問いかけになりやすい。しかし、これは間違った考えだ、という、このたとえ話の見直し、現在は行われているのです。

ある本によると、『伝統的な解釈では「主人とは神様のこと」として、霊的な話として読まれてきました。「信者たちが神様に従い、自分に与えられたタレント（能力）を用いて、熱心に霊的な業に励むとき、主なる神は大きな恵みと喜びで報いてくださる。しかし神様に従わない悪い怠け者の信徒たちには厳しい裁きが下される。」というような解釈です。

こうしてこのたとえ話は、信者たちに最後の審判の警告を発し、霊的な良い信徒であろうとして励む人々の福音として、宣言されてきました。また、この流れの中で倫理的・道徳的な勤勉を勧める教えにも用いられて、資本主義経済の発展に大いに貢献したとも言われています。でもこのたとえ話は本当に「霊的な業」に励むことを教える話だったのでしょうか。勤勉の勧めのような道徳的な話だったのでしょうか？ 主人が預けたお金のことから考えてみましょう。』と書かれていました。

5タラント、2タラント、1タラントというお金を、私たちは具体的に日本円に換算して考えなければなりません。聖書の終わりの所にある度量衡および通貨の表を見ると、タラントは、「ギリシアで用いた計算用の単位で、6000ドラクメに相当。」そしてギリシアのドラクメが、ローマのデナリオンと同じ価値で、1日の賃金だそうです。簡単に理解するため、1日の賃金を1万円としましょう。

たとえ話の主人は、自分の僕に、3億円、1億2千万円、6000万円を預けた、ということです。この話を聞いた、貧しい民衆が、預かった僕に自分を置き換えて聞くことができるのでしょうか？ おそらく、民衆には、どこかの金持ちが、エリート社員に仕事を任せたような話と受け取ったでしょう。

しかも、預かった最初のふたりは、働いてそれを倍にした、と語られています。自分の持っているお金を倍にするなんて、どうやるのでしょうか。

普通の職人や商人のような働き方をしていたら、そんな大きな利益は得られません。

おそらく、土地を抵当にした高利貸しで、借金が払えないと土地を没収していたのでしょう。

この主人がどんな仕事をしていたかは、3人目の人の証言で推測できます。

『25:24 ところで、一タラント預かった者も進み出て言った。『御主人様、あなたは蒔かない所から刈り取り、散らさない所からかき集められる厳しい方だと知っていましたので、25:25 恐ろしくなり、出かけて行って、あなたのタラントを地の中に隠して／おきました。御覧ください。これがあなたのお金です。』

『蒔かない所から刈り取る』とは、農民たちの労働による収穫を横取りすることです。

『散らさない所からかき集められる』というのは、もう少し説明がいります。『散らす』とは、散財、浪費を意味します。たとえば、自分の奴隷たちに時にはご馳走を振舞うということさえしないで、こき使うだけこき使って私腹を肥やす、冷酷な支配者だということの表現です。

この3人目の僕が語った、主人への批判に対して、主人は弁明などしていません。指摘の通り自分はアクドイ人間であることを認めています。しかしそれを反省する気持ちなど、これっぽっちもありません。「そんなに私の仕事が嫌なら、銀行に預けておけばよかったんだ。役に立たないお前はクビだ。」と言っているのです。

そして、このアクドイ主人は、アクドイ方法で金をもうけたふたりの僕を「忠実な良い僕だ。」と褒めるのです。

さあ、このイエス様が語ったお話はガリラヤの貧しい民衆にはどう映ったのでしょうか。

アクトイ金持ちが、やはりアクトイ方法で金を儲けた僕を褒めて、彼らはますます豊かになります。しかし、そのアクトイやり方を告発し抵抗した僕は、失業へと追いやられるのです。そして、このような支配者のもとで貧しく暮らしている民衆は、ますます苦しい生活を強いられるようになってゆくのです。

おそらく、イエス様は、イスラエルの支配者やその部下たちの横暴なやりかたや、それについて良心の呵責のために、お金を土の中に隠した人たちの現実を語りながら、「こんなひどいことがあっていいのか！」と民衆に問いかけ、「あなたがた貧しい人は、幸いだ。天の国はあなたがたのものだ。そうならなきゃいけない。」と、問題を投げかけるような話をされたのではないか。

ところが、時代が下って、教会の中にも豊かな人々が増えたためか、マタイは「心の貧しい人々は幸いである、天の国はその人たちのものである」という風に内容を薄めてしまい、今日のようなたとえ話では、暴君がいつの間にか、神様に間違えられるような、弱い書き方になってきているのではないのでしょうか。

世の不正を糾すことの大切さを語っているのであって、暴君のような神様の命令のために、尻を叩かれながら、苦しんで働くことを目指せ、とは、イエス様は言っておられないように思うのです。

3年前の8月の教区報にも書いたことがありますが、日本はこの30年余りの間に、格差社会が生まれています。

たとえ話の最後の方で主人が言った言葉『25:29 だれでも持っている人は更に与えられて豊かになるが、持っていない人は持っているものまでも取り上げられる。』は、イエス様が神様の御心として語られたのではなく、そんな格差社会への痛烈な批判の声だったのに、いつの間にか業績をあげることを根拠づけるように間違っ

て教会は伝えてきたのだらうと思われ

ます。

これは、「ぶどう園の労働者」のたとえに出てくる優しい主人の話とは真逆の、悪徳業者の話として受け止めなければならないという見方が現在の見解です。

伝統的な聖書の読み方に対して、もう一度読み直し、考え直す時を持つべきだと思わされたことでした。